

教科・学年をこえた教育課程と授業開発に関する事例研究

—公立中学校の実践事例と SDGs の教材活用を通して—

松永 雄平（長崎大学大学院教育学研究科）

藤井 佑介（長崎大学大学院教育学研究科）

木村 国広（長崎大学大学院教育学研究科）

1. 背景と目的

令和3年度から中学校において全面実施となる学習指導要領では、子どもたちに予測困難といわれる未来社会の創り手としての資質・能力を育むために、社会に開かれた教育課程の実現を重要な位置付けとしている。子どもたちは、社会のつながりの中で学ぶことで、自分の力で人生や社会をよりよくできるという実感を持つことができる。このことは、予測困難な未来社会の創り手である子どもたちの希望や力となる。そのため、学校には、社会と連携・協働した教育活動の充実がますます求められている。文部科学省は社会に開かれた教育課程について、①よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を、学校・保護者・地域の3者が共有しており、②これからの社会を創る子どもたちに必要な資質・能力が何か(学校教育目標)を明らかにすることができ、③学校と保護者、地域が連携・協働しながら学校教育目標を実現することができるものであると説明している。これらを実現するために、学校は、児童生徒の実態や地域の実情等を踏まえた学校教育目標をつくり、そこで育成する資質・能力を保護者や地域と共有し、どのような教育活動に取り組むかアイデアを出し合い、教育課程を編成しなければならない。実践の場面では、保護者や地域住民の協力を得ながら、地域全体を学びの場としていくことが必要である。

社会に開かれた教育課程を実現するためには、教科・学年をこえた教育課程の編成が求められる。それは、実際の社会や生活で生きてはたらく知識および技能、未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力、学んだことを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力や人間性などの資質・能力を育成するために、学校教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、目標達成に必要な教育内容を組織的に配列することが必要だからである。ここで言う学校教育目標とは、学校教育全体で育成する資質・能力であり、例えば、自己決定力や他者理解力、読解力や論理的思考力、自己実現や社会貢献に向かう力など、問題解決における汎用的能力である。また、各教科等の教育内容を相互の関係で捉えるとは、学校教育目標と各教科等で育成する資質・能力との関連を明らかにすることであり、例えば、各教科等が育成する資質・能力を、それぞれ学校教育目標が求める資質・能力で整理することである。教科・学年をこえた教育課程として、具体的には、学校教育目標が目指す資質・能力育成の視点と、キャリア教育や情報教育等の現代的な課題に対

応する視点が必要である。

そこで、本研究では、社会に開かれた教育課程に関する公立 A 中学校の実践の現状と課題を明らかにするとともに授業実践を行い、学校現場における教科・学年をこえた教育課程の新たな知見を得ることを目的とした。

2. A 中学校における実践事例

第一著者が所属する教職大学院のカリキュラムの一環として A 中学校にて 40 日間の実習を行った。実習期間は 2020 年 4 月から 2021 年 2 月である。実習では特に研究テーマに則して授業の参観や取組に関する状況の把握を行った。本項では、A 中学校の実践において特徴的であった 2 つの実践事例を以下に整理する。

(1) 第 3 学年における総合的な学習の時間の実践事例

2020 年 9 月下旬に、第 3 学年の総合的な学習の時間の取組を観察した。この学年は第 1 学年のときから、平和についてのテーマで継続的に学びを深めており、地域に住む方の被爆体験講話を聞き、紙芝居を作成している。この講話をした方は当該学年を小学校から見てきた A 中学校の職員の家族であり、被爆のことを今まで他の人に話したことはないが、ご自身がご高齢で何か伝えておきたいと思っていること、地域に住む子どもなら伝えたいと思ったことから、講話につながったということである。第 2 学年時には、修学旅行において、旅行先で平和に関するアンケートを行っている。

2 学年までの学びを踏まえた上で、第 3 学年では発表の準備が行われた。発表は、より多くの人、とりわけ外国の方にも被爆体験や平和への思いを共有することを目的としている。発表までの準備は、総合的な学習の時間を中心としながら、英語科で第 1 学年時に制作した紙芝居を英語に翻訳、音楽科で平和への思いを伝える歌の練習、国語科で朗読の表現の検討と練習など、教科を横断して取組が行われた。また、特別の教科である道徳においても被爆地ナガサキとして、継続的な平和学習が行われている。これらそれぞれの教科等の資質・能力を使って発表の準備が進められ、発表当日は体育館にて学習成果の発表として、朗読、紙芝居、合唱が行われた。紙芝居については日本語バージョンと英語バージョンで披露され、言語を越えた発信がなされた。

この学習においては、事前に市の記者室への案内を行なったことで、新聞、県内テレビ各局など数社の取材を受け、学習活動を地域や社会に向けて開く広報材料にもなった。また、この紙芝居の発表の様子は学校ホームページに掲載し、多くの人に発信できるように準備している。具体的な学習成果として記録していくことで、自己の学びを振り返る機会にもなるものと考ええる。

図 1 は、これらの実践の関連を図で示したものである。

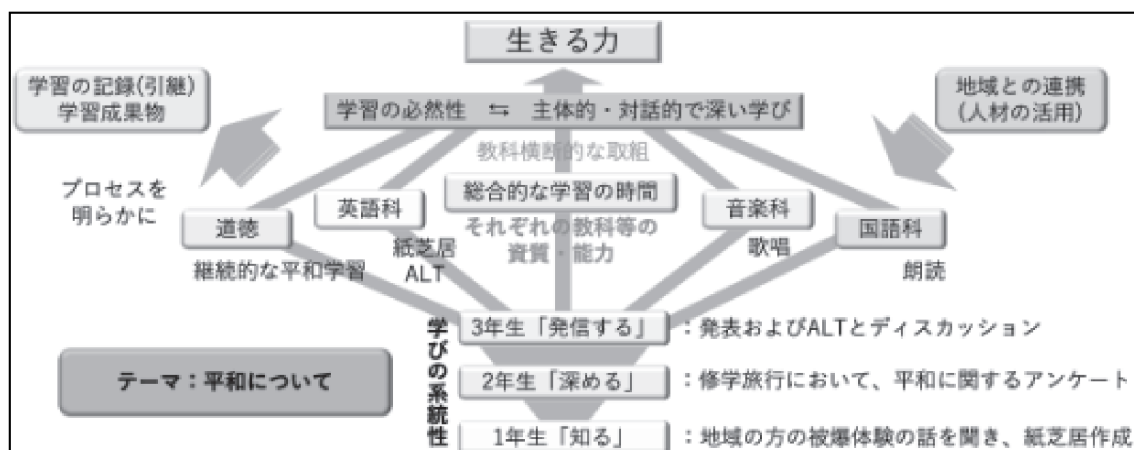


図 1. 第 3 学年における総合的な学習の時間の構成

(2) 第 1・2 学年における総合的な学習の時間の実践事例

2021 年 2 月中旬に、第 1・2 学年の総合的な学習の時間を参観した。令和 2 年度はコロナ禍の状況にあって、講師の招聘や体験活動等が難しい状況にあった。また、その前年度も年度末にはそのような活動が実施できなかった。A 中学校の先生方は、このような状況をどうにかできないかと考え、職業講話について学年主任と管理職で打ち合わせ、オンラインでの講話を行っていただく方針を決定した。その際、PTA 会長に依頼を行い、講話の方針を共有した上で PTA 会長より依頼を行う形をとった。PTA 会長は地域や多様な職業の方と繋がりが深く、社会的信用がある方であり、コーディネート能力に長けている方である。依頼の結果、地域にある呉服店の店主、建設会社社長などの地域に密着している職業の方、アナウンサーやウェディングプランナー、消防署長など子どもが憧れる職業の方、地域創生を担当している市役所職員やコミュニティデザイナーなど地域の活性化を担う職業に就いている方など、多様な視点での職業の見方や生き方について話を聞く機会となった。今回はコロナ禍での開催であり、直接対面しての講話ができなかったため、別室より Google Meet で教室と繋ぎ、講話を聞く形をとった。おおよそ 1 単位時間に 2 名の講話と質疑応答を行い、最後の時間は振り返りも含めたまとめの時間として確保していた。こうすることで、対面による万が一の感染を避けることができ、質問等のやりとりも不自由なく行うことができた。依頼においては、教師が外部講師に直接依頼をかけることにこだわらず、学校関係者を取り込みながら教育活動を展開していくことで、時代のニーズに合わせた活動や支援を展開することができる。また、その新しく作られた地域での人間関係が次の活動—例えば職場体験活動の受け入れ—につなげることができる。講話から世の中の実際や将来の見通しに示唆を得ることで、各教科等の資質・能力の育成につなげたり、これを利用して学習を深化させたりし、教科横断的に学びを深めていくことが考えられる。

図 2 は、これらの関係を整理したものである。

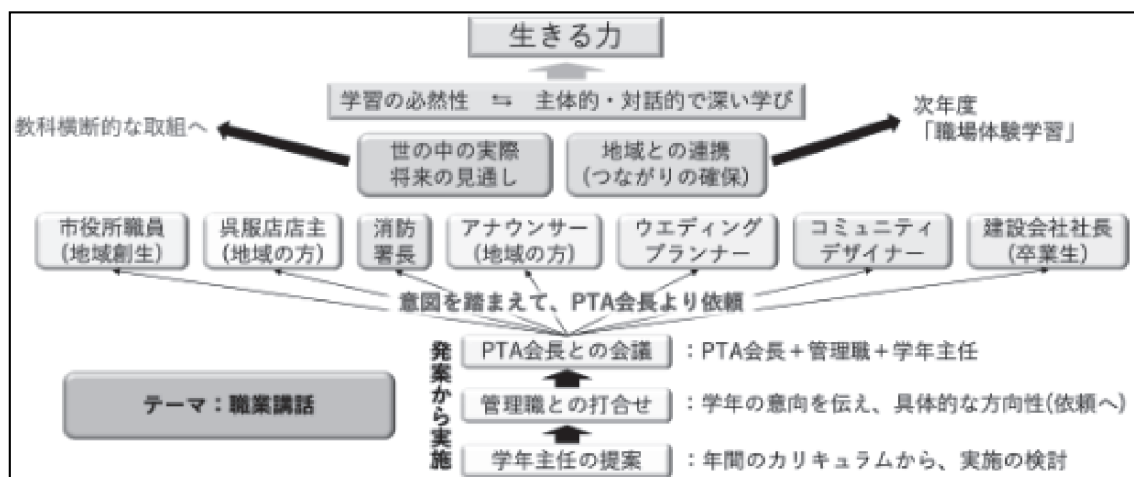


図 2. 職業講話における依頼の流れと展開

3. 第一著者による授業実践

第一著者が A 中学校の状況を踏まえ、2020 年 12 月の人権週間における全学年での人権集会およびその後に行われた第 3 学年の人権学習を担当した。本項では授業実践の実践について紹介する。

持続可能な開発目標 (SDGs: Sustainable Development Goals) とは、2001 年に策定されたミレニアム開発目標 (MDGs) の後継として、2015 年 9 月の国連サミットで加盟国の全会一致で採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」に記載された、2030 年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標である。「誰一人取り残さない (leave no one behind)」取組として、世界中の国や地域、官公庁、企業など世界中の人々が意識し取り組むことが必要とされるが、まだまだ教育現場に浸透しているとは言い難い。

私たちが住む地球では、近年ますます気候変動や貧困、資源の枯渇など、地球規模の課題に直面し、将来の安定した暮らしが危ぶまれている。SDGs では直接的に人権に関わる課題が示されていると同時に、暮らしが不安定になることによって新たな人権問題が発生してくることが予想されることから、SDGs を学ぶことは、直接的、間接的に人権問題を考え、具体的な実行に移すことのきっかけとなると考える。現代の予測困難な社会において、私たちを取り巻く環境は日々変化し、多くの問題や課題を抱えている。私たちが生きる権利が脅かされている現実、日々目の前に転がっている。そのような中、自らその問題点に気づき、「じぶんごと」として解決への方策を考え、行動に移していくことは、私たちに課せられた使命でもある。それらの現代的な問題点を踏まえて目標として掲げたものが SDGs であり、今回の学習では、人権学習を SDGs を踏まえた視点で実施する。

授業準備においては、教頭、人権学習の担当教諭数名と打ち合わせをしながら授業づくりに取り組んだ。人権集会では、SDGs の基礎から解説し、人権や普段の学習とのつながり、自分たちの「当たり前」の感覚を見直すことをゴールとして、講義と活動の時間を設定した。第 3 学年の人権学習では、人権集会での学びをさらに自分たちの行動に結びつけられるように、グループ活動を行い、具体的な行動目標を設定した。

(1) 人権集会での実践

① イントロダクション

「SDGs×人権 ～SDGsを通して考える人権～」と題して担当した。この時間のゴールとして3つを設定した。1つ目は、SDGsの考え方や取組がわかること。2つ目は、SDGsと人権のつながりがわかること、あるいは普段学んでいることや経験していることとのつながりがわかること。3つ目は、普段「当たり前」だと思っていることがそうではないことに気付くことであった。最初に、SDGsの概要を説明するとともに、「じぶんごと」として、私たち一人ひとりが取り組むことが求められていることを強調した。ここで、今、世の中で起きている人権問題についてどのようなものがあるか、グループで話し合いの時間を設けた。「障害がある方の差別の問題」「戦争や内戦で人権問題」などの意見が発表され、生徒の中にある人権問題の捉えを概観的に把握することができた。その後、国連広報センターが作成した「持続可能な開発（SDGs）への道-子どもたちと考える-」のムービーを視聴、SDGsの17のゴールを確認した。

次に、図3のように、人権とSDGsとのつながりを解説し、このような世の中で今起きている問題を「じぶんごと」として捉え、みんなで考えていくことで、「持続可能でより良い社会」「誰ひとり取り残さない社会」を実現できるという見通しを示した。

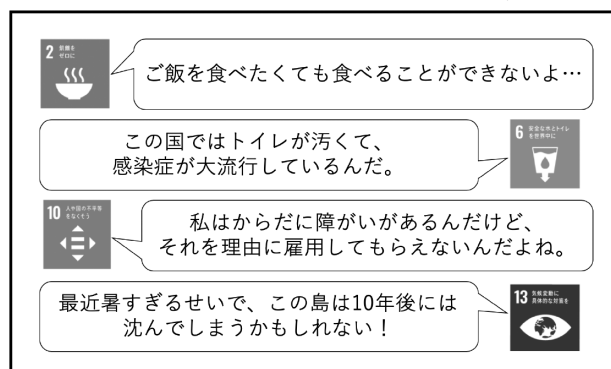


図3. 人権とのつながり

② エピソードシート

具体的に考えていくために、エピソードシートという用紙を用意した。このシートには、具体的な人権問題を含むエピソードが書かれている。このシートを使い、グループで「それってなんか変じゃない？」「それってどうにかできなかったの？」という部分を探す活動を行った。まず episode0 で問題の探し方を練習し、episode1～3 で実際にグループでの活動に入った。図4は、そのときに使ったエピソードシートである。

グループでは、A3 版に印刷したシートの違和感がある部分に、マジックで線を引くという活動を行った。合わせて、グループではその理由についても検討していた。

例えば episode1 でいうと、「小学校から高校まで、約1時間離れた特別支援学校に通う。」という部分について、地元には学校がなかったのか、小中高校には行けなかったのか、という疑問が上がる。「母親の送迎で通う。」という部分について、「お母さんは仕事をしたくてもできないのではないかと推察される。」「注文が聞き取れないということから夢をあきらめる。」ということについては、耳が聞こえないことで差別を受けるのかという思いが湧く。「月の給与は8万円程度」という部分では、生活が厳しいのではないかと考える。このように、1枚のシートの文面から、相手の状況や気持ちを慮り、問題点を見出す力を育成することを意図している。グループでの活動のあと、発表によってそれらの意見を共有した。ただし、時間の都合上、違和感のある部分に線を引いた理由までは聞くことができなかった。

【episode 0】

健太さんは、生まれつきエイズという病気です。カゼを
すぐひいてしまい、咳がたくさん出て入院すること
もありました。小学校に行くようになった時、病気が
原因で「あいつに触ったら病気がうつる」というわさが流れ、
友達ができませんでした。
健太さんの家は川の近くにありますが。昔ながらの家なので、川から
水をひいて使っています。高校生になった最近、水の色や匂いが
少し変だと感じています。体調も良くありません。
気持ちをスカッとさせたくて、健太さんはタバコを1本吸いました。
近所のお兄さんが、タバコは疲れた時に吸うといいよと教えて
くれたのです。

3 すべての人に
健康と福祉を

【episode1】

里美さんは、生まれつき耳が聞こえません。
小学校から高校まで、約1時間離れた特別支援
学校に、母親の送迎で通っていました。
高校を卒業して、里美さんはカフェの店員になりたいという夢が
ありましたが、注文が聞き取れないということから夢をあきらめ、
地元の作業所で働くことになりました。
作業所は耳が聞こえない方や目が見えない方も多く、里美さん
のこともよく理解してくれるのですが、月の給与は8万円程度、
最近はずっと送迎をしてくれていた母親も病気がちです。
里美さんは今でも、いつかカフェで働きたいという希望を胸に
秘めています。

10 人や国の不平等
をなくそう

【episode2】

エリコさんは、女の子です。
将来は建築現場で現場監督として働くのが夢ですが、
父親からは、「女の子がそんなところで働くもんじゃない」
と言われていて、エリコさんは、悲しくなると同時に、女の子という
言葉に違和感を覚えています。スカートを履くのも違和感があり
ます。エリコさんの好きな人は、クラスのママさんという女の子です。
しかし、そのことをクラスのみんなからからかわれます。
エリコさんの母親は、市議会議員をやっていましたが、エリコさんを
出産したときに仕事を辞めることになったそうです。育児と仕事は
両立できないと周りの人に言われたそうです。
父親は一生懸命働いていますが、母親からいつも「男なのに給料
が少ない」と文句を言われています。

5 ジェンダー平等を
実現しよう

【episode3】

中学生のユウジさんは、食べることが大好きです。
料理も大好きなので、自分で買い物をして、食べて
もらうのも好きなので、毎回ついつい作りすぎてしま
います。余った料理は捨てるしかありませんが、外国産の安い食材を
使っているので大丈夫です。
余った牛乳などの液体は流しに捨て、野菜などの固形物は生ゴミ
に捨てるように分別しています。最近、食品が何重にも頑丈に
包装されているので、賞味期限が長くなりました。
それにしても、最近レタスが異常に高いです。キュウリも小さくて高い
です。大好きなサラダは、しばらくお預けです。

12 つくも責任
つかう責任

図4. エピソードシート

③ SDGs の視点と普段の学びとの関連

エピソードシートでのグループ活動のあと、この世の中で起こっていることは「当たり前」のことではなく、その問題点に気づくことが重要だということ、世の中を知ったり学んだりすることは、世の中で起こっていることとつながっており役に立つということ、それを踏まえて自分は今までどうしていたか、これからどんなことができるか、自分を振り返ることが必要だということ、その上で、世の中の問題点の解決のために私たちができることを考える必要があるということを経験した。

また、障害について、LGBTQIA+やSOGI (Sexual Orientation (性的指向) と Gender Identity (性自認)) について、フェアトレードについての話など、エピソードシートで扱った話題で人権問題を考えるのに必要だと思われる知識を例としていくつか取り扱った。その例が図5および図6である。加えて、各教科等での学び方についても SDGs の17のゴールのつながりを例として挙げ、全ての学びがつながっていることやこれからの学び方について共有した。

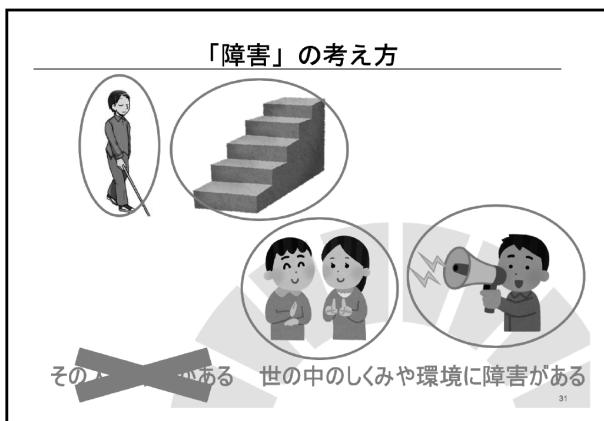


図5. 「障害」の考え方

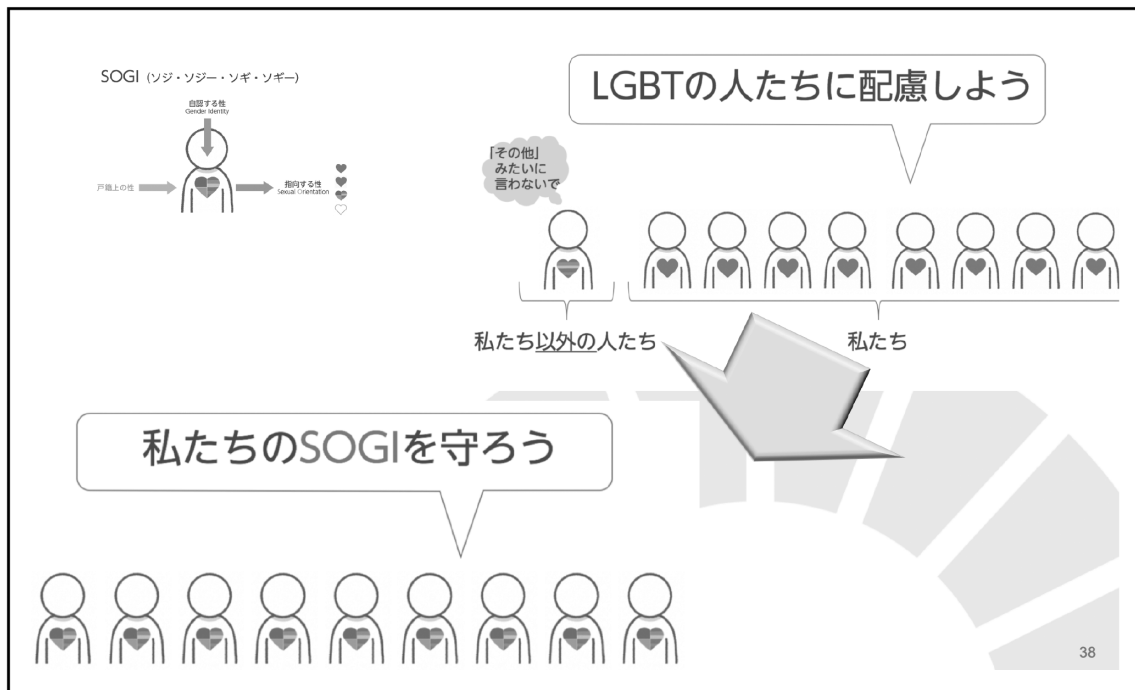


図6. LGBTQIA+とSOGI

(2) 第3学年人権学習での実践

① イントロダクションとグループ活動

本実践は、学年の2学級合同で実施した。まずは前の週の復習として、SDGsの概要、17のゴール、人権とのつながりを確認した。その後、学習内容の説明を行った。世の中で現実に起こっている様々な問題点を書いてある『ヨノナカのゲンジツ』カード(図7:2つのみ掲載)を各グループで選択し、人権集会と同じように「問題点」を検討し、解決策についてディスカッションを行う。その際に絶対的な知識量が不足していることから、補足資料を配付した。(図8:一部のみ掲載)この補足資料には、カードに書いてあるエピソードについて、どこが問題点であるのか考えるのにヒントとなる資料が含まれている。同時に、ヒントにならない部分も含まれているため、資料の中から必要な部分のみを読み取る読解力が必要とされる。説明が終わったあと、生徒は各グループでの活動に入った。

【Episode A】ミチコさんと叔母のはなし	【Episode B】絵美里(エミリ)さんのはなし
<p>ミチコさんは叔母と暮らしており、叔母は病気がちでいつも苦しい思いをしています。カゼの診察にも1万円ほどかかってしまうので、病院に行くお金がなく、「ガマンすれば治る」の一点張りです。叔母はスーパーでパートをしていますが、病気で休んだ時にはお給料は出ません。そのためミチコさんは1日3食を食べることができず空腹です。学校に行く気力が起きず、学校を休みがちになりました。そのため、授業はほとんど理解できません。</p> <p>ミチコさんは、高校に進学せず、働く場所を探し始めましたがなかなか見つかりません。3つのアルバイトを掛け持ちして働きづめでしたが十分な給料とはいかず、とうとうミチコさん自身も病気になってしまいました。</p>	<p>絵美里さんは、インド生まれの父親アブラハムさんと、韓国生まれの母親ジアンさんの間に生まれた日本人です。小さい頃から、見た目が日本人らしくないので、みんなにからかわれていました。韓国と日本の関係が悪くなったときには、みんな絵美里さんに「韓国に帰れよ。」とアドバイスしたそうです。</p> <p>絵美里さんは目が見えにくく、メガネをかけていますが、それでも街中では人にぶつかったり、ものがあると当たって転んだりしてしまいます。今度、父親の仕事の都合で関西に引っ越すことになりました。新しい土地に不安も大きく、絵美里さんはもう学校に行きたくないと思っています。</p>

図7. 「ヨノナカのゲンジツ」カード



図8. 説明のヒント資料

各グループでの活動は、1時間以上の時間を確保し、机間指導で必要に応じてアドバイスをを行った。学年担当職員の5名の教諭にもサポートをいただきながら生徒のグループ活動を支援する形をとった。その際に考えを整理するのに使ったグループのワークシートが図9である。問題点を見出し、それをどのように解決していくか、そのために自分がどのような行動をすれば良いのかということを順序立てて記入する形になっている。また、記入後はそのまま発表できるように形を作っている。

Episode 自分たちができること

《自分たちができること》

《解決方法》

《問題点(理由を含む:人権との関わり)》

図9. グループのワークシート

② 発表と共有

発表は、教室で1学級ごとに実施した。学級の前後同時に2グループが、ポスターセッション形式での発表を行った。カードでは3つのエピソードを扱っていたため、それぞれの生徒は自分のグループの発表に加えて、別の2つのエピソードと自分たちと同じエピソードの発表をそれぞれ1班ずつ聞くことができるように設定した。発表の時間の前に、発表資料の最終的なまとめと発表練習の時間を設定していただいたので、短い時間での発表会であったが、生徒は順序立てて自分たちの考えを発表することができた。発表のあとは、これからの学習の見通しを含めてまとめを行い、感想を記入し学習を締めくくった。

4. 考察

第3学年の例では、長崎にいる私たちにとって身近な問題をどのように捉え、位置付け、学び、解決や発信しようとしていくのか、時間をかけ系統立てて教育課程を組んでいる。学校教育目標に照らし合わせ子どもたちに身につけてほしい力が反映され、地域の力を借りながら教育活動を展開することができており、前述の社会に開かれた教育課程の意義にも合致するものである。そのことが各教科等で学ぶ必然性を生み出し、主体的・対話的で深い学びを構築していくことになり、実生活で生きる学びになったのではないかと考える。また、学校職員間で信頼関係を築き、第3学年の授業担当者間でのコミュニケーションが円滑だったからこそ教科横断的な取組が実現できた。これが、被爆体験をお話しいただいた方とのつながりを増強する手助けになったと考えられる。このように教員の同僚性が教育活動の広がりを手助けしていることは明らかで、これから社会に開かれた教育課程を実現する上では、よりよい人間関係の構築が必要不可欠なものになると考える。

また、発表の様子を撮影し、ホームページに掲載して社会に向けて発信することで、より多くの方に被爆体験について知ってもらうことができる。今後はその方法を増やしたり、スムーズな発信によってより多くの人に関心を持てるよう工夫したりすることで、目的の達成に近づくものと考ええる。

第1・2学年の例では、子どもたち自身が将来へ向けての課題や見通しを持ったり、世の中や他人の生き方を学んだり、様々な職業について知ったりすることができた。通常は例年お願いしている企業等に形式的にお願いすることが多いが、コーディネート能力に長けている学校関係者の方を頼ることによって、より時代に適合した教育活動が展開されるものと考ええる。ここでも、学年主任と管理職の関係、PTA会長と学校職員の関係、PTA会長と講話担当者との関係など、人間関係がうまくいっていたからこそ講話が実現できたと考えられる。コロナ禍で教育活動が制限される中で、双方向性のビデオ通話システムを使うことで対面の形式とほぼ変わらない環境を提供することができた。このように、ICT機器の活用は学びの幅を広げ、社会とつながりを持つ1つのツールでもある。積極的な活用が社会に開かれた教育課程の実現に繋がると考える。

人権学習の授業実践では、普段の学びをSDGsという視点で捉え直すことで、学びのつながりが強く意識され、子どもが学習に必然性をより持つきっかけにできたと考ええる。17の目標は現代的な諸課題として、どこかで人権につながっているものであり、問題点に気づく視点を生徒と共有できた。ただし、問題点は普段、文章ではなく目の前にある状況で生み出されるものであり、その状況に気づいて行動できる力をつけていく必要がある。そのため、教師が連携し、複数の教科等の連携を図りながら授業をつくることが求められる。

5. まとめと今後の課題

本研究では、A 中学校の事例と授業実践を通して、教科・学年をこえた教育課程の実現において大きく3点の知見が得られた。

まず、教員間の同僚性や地域の方とのつながりが重要となることである。教科・学年をこえた教育課程の編成のためには、年間あるいは数年間を通した計画をしているものもあり、一定の準備が必要といえる。中学校では教科担任制であり、職員が共通理解のもと進めていかなければ連携を図ることができない。また、地域の方や学校に関わる方の協力を得ることで、さらに学びの可能性が広がっていく。学校には、地域社会と連携・協働するための人間関係の構築を恒常的に図っていくことが必要とされる。

次に ICT の有効的な活用である。このコロナ禍にあって、GIGA スクール構想に関わる設備や機材などが着実に整えられ、遠くにいても学びを広げられるシステムや社会とつながることができる要素は確実に増えている。これらを積極的に活用することも、社会に開かれた教育課程を実現する上で必要であると考える。

さらに、SDGs の教材としての価値である。教科や学年をこえる教育課程を実現するに当たり、SDGs を教材として展開することで現代的な諸課題に対応する視点で各教科等を横断して教育課程を構成することができ、学びを相互に関連づけ、問題解決における汎用的能力を育成することができると考える。

本研究における課題としては、A 中学校における事例のみに留まっているため、さらに他の学校における事例を調査し、自らも実践していくことが挙げられる。また、十分な分析の視点を持つことができていないことから、多角的な分析を行っていく必要がある。

謝 辞

公立 A 中学校の校長先生をはじめとする先生方、学校関係者、地域の皆様、本研究に関わった方々に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- ・文部科学省(2018)『中学校学習指導要領(平成29年告示)総則』。
- ・文部科学省ホームページ「社会に開かれた教育課程」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/newcs/__icsFiles/afieldfile/2020/01/28/20200128_mxt_kouhou02_03.pdf (2021年3月30日閲覧)。
- ・東京都人権啓発センター (2019)『TOKYO 人権』 第83号。
- ・外務省ホームページ <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/about/index.html> (2021年3月30日閲覧)